



明加  
667  
卷 4

本朝俗諺志四之卷

- 一 佐渡越字水
- 二 上総志河川
- 三 武州室太糴鹽
- 四 大坂天王寺三水四石
- 五 佐渡海題目
- 六 相州神代杉
- 七 京蛸茶師
- 八 洛東山觀本多
- 九 足波笑地蔵
- 十 江戸粟欠地蔵
- 十一 丹波切戸合糴
- 十二 有野州岩船
- 十三 安藝巖瀬祭
- 十四 筑前百合若廟
- 十五 佐和勢地蔵
- 十六 佐和勢地蔵
- 十七 玄州後石



多

⑨ 京麩宮寺天狗宴

⑧ 京祇園削掛柿干

⑦ 海坊主

⑥ 箱根蜘蛛餅

⑤ 信州戸隠山

九頭竜王

④ 伊豆八丈鹹草

同為く  
為朝為後り

③ 奥州舍利濱

⑩ 下流千葉焚

⑪ 上州榛名幣

⑫ 赤列毛坊主

⑬ 伊豆熱海温泉

⑭ 伊豆山柳

⑮ 紀州若浦

吹上私

⑯ 奥州高館

義経為後り

本朝俗談志卷之四

米山翁沾涼著

① 梵字水

佐渡國甲斐布村擅特心弘法大師の用基子  
て真言宗といはるる不勤滝大日滝といへり乃  
滝あり所のあの中に不動尊大日如來の像あり  
洋よりとある其流の川下は梵字キヤ字の凡字を  
たしめありありの梵字の影のありに流あり其  
梵字なる所の水を汲く大赤流なりよりの重し  
この中は凡字といふ心海と云ふ所の傍回國  
の時よりあり信仰の未ゆり 釋尊二三合はあり





五 海と題目

佐後國小木の湊の沖水而して七層のそ題うま  
ひし日蓮上人の必死の所出給ふ所の題目  
今も天の所を水とあり浪の神と  
峯は川をてりあり

六 箱根神代杉

相州箱根湖の底より大なる杉を伐立給ひて  
運ぶなりし水産子入しおまを伐出 匠おまこ  
盆ホころの魚物に作りし色々の板よりまは  
て作りしきりくし大さのりこ人ケラ板一板  
くく作りし又板ともあり

佐後の九字水



佐後の川あり



七 燈藥師

京都蟻葉所、眩瘧（ふかやう）の多乳子蝟（むら）を助也（たすけ）なり  
祈りもも別念（べつねん）の奇しくは葉所いじりて蝟を  
云貴人の家に虫毎に走り物ありといはれり  
てお見し一々子蝟の命なりとてりけりお見し  
今もと埋（うめ）とみり也と捨入し一々子蝟の命なり  
かく燈燄（とうえん）をいれし蝟の心は葉所の傍ありて  
かり多しとてみりて人氏信仰とてしありて  
精進の業所とて念をいれりて葉所は葉所なり  
蝟を治るなりとてありて助也（たすけ）なりとて其  
ゆきありとていふは方の位をいふとてありて

八 顧本尊

洛陽東山聖衆来迎山禪板寺の河内沈黎の顧  
所（ところ）なり谷（や）しありて天武帝齊僧羊才が寺別  
所（ところ）なり其法所（そのほ）なり元（もと）の法相宗なり  
三宗をありて武時（ぶじ）永観（えいくわん）の造立し禪律淨土の  
なりとありて顧（こ）佛（ぶつ）と稱（な）なり  
を獲（と）し顧佛と稱（な）なり

九 哭地藏

天徳寺（てんとくじ）腰川のそとに小堂あり是れ地藏の  
うき（うき）の奇物あり西のは所（ところ）なり

因東平向の村ありわびてびきりるるをきりてお  
を流く里人の云ひ世を流るるは是度川の橋より  
水才橋本ありしをきりてありしを以て世を流るに  
脚部せしは流るる其強其きりしとて時を流  
朽ゆるゆきよの橋よりきりて今を流るし  
と流るるを以て世を流るるは是度川の橋より  
是もは西佐の西行流代の士也きりしに奈んして  
流るるは流るる必るきりて流るるは流るる  
因の事ありききりてしとて一度きりて流るるは  
くやきりて流るるは流るるは流るるは流るる  
と流るるは流るるは流るるは流るるは流るる

中し西佐大さるるきりて流るるは流るるは流るる  
西りの云部を以てきりて流るるは流るるは流るる  
おんく流るるは流るるは流るるは流るるは流るる  
ふりて流るるは流るるは流るるは流るるは流るる

十 竊知地蔵

江戸深川為智と奉抄寺の卯塔の中に何人の  
墓ありしと云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふ  
勝て流るるは流るるは流るるは流るるは流るる  
と流るるは流るるは流るるは流るるは流るるは流るる  
おんく流るるは流るるは流るるは流るるは流るる  
の流るるは流るるは流るるは流るるは流るるは流るる





沙きして神楽を形遷しきまじりて  
 ありて糸れ延くしやと其日の沙時にわたりて神  
 雲をくす別段に降る事お奇しくひりて  
 と云ふ神は居のさうとあはれをわすつてこのあま  
 しやうつて一箇をさうと云西面を遠く戻回廊百十  
 ちりりり六回廊のりりり入んは舞の糸舞し折れぬ  
 折るは雨をひ日本三景の好む麻多るなり

吉 綱 不 知 神 社

紀州流去る民の心とよむ社や友を命出長の雲と糸  
 追紅破をわたりてあうり事ありてその所りりりり  
 あまは神の行はれしはわたくし事神楽なり



吉 綱 不 知 神 社



吉 綱 不 知 神 社



⑥ 龍燈の松 満行石

信前國岡山の北に高きあり笠井茶所宮の傍に  
流燈の松ありあり毎夜灯をともし夏はもと  
多し一ははきこに今もいふ云ふの嶺に大なるあり  
はふより方一人とくりの穴ありありとて塔の満年あり  
大夕の時に穴より流燈くはくし流燈の奇し

⑦ 天狗宴

洛陽東に龍定寺毎年二月二日の夜牛王加持  
あり其間門前の大神人ありありは燈を吹左殿  
をたして流燈の宴すその儀喧し乞を  
二人物宴よりいし

⑧ 千葉笑

下総國千葉郡千葉寺にて毎年拾月毎日此夜  
法人ありあり西也から一法をのこすをたかして下  
の寺の政人庄屋年寄依怙自負吾恩をのこす  
大さきあひ寝殿せり法役人けあひよあひ  
常より懐むし又行跡ありき人親を人孝を人  
此寺はあひよあひ今をばいし月此の  
よれた教派しあひよあひ

⑨ 削懸の神事

京祇園に十二月毎日の削懸の神事ありは  
春満のき懸ありいふよあひ悪口難言と吐

大さきよの言し國中誰あまといふやうやくを又  
棒千切木の河はなくまの、之葉を幾びともうかり  
只の肩より凶云猶い昔事しとまよ事ありし

④ 榛 谷 幣

上州榛谷山の年中の葉子敷十丈の大岩幣  
より其頂子幣をさきり中く人倫のふあき  
あはれ毎季十二月海り子白幣を切葉子入神  
流わりの社にの幣をさきりかの幣をさきり又  
餅を入社幣に下り立て候を宮さ油に扱ひ餅  
一つももへるさきりしはよきん子扱ひ幣とさき  
してあきを取ぬ相昔たれとまの幣に元也てあ

⑤ 海 坊 全

大國のあつ事し是年河州土列の坊の仲とて  
高さ十丈さきり上りてく福ひるりして大佛の  
かりもの取しおほき亦もあきととあきり  
さきり取の虫より其肩五六所さきりまきり  
ありしとさきりさきりさきりさきりさきり  
うせりし形取のさきりを海坊ととりまきり  
もの邂逅さきりさきりさきりさきりさきり  
案生ありものとりさきりさきりさきりさきり  
一葉に消へるものく消やうを考あきと海上の  
たうん風とて地の云をまきりさきりさきり

④ 毛坊主

花洲の山中に毛坊主とありありのりまきりきん農業本拠として  
昔の百姓を苦しめたるの奥ひろく出家なりしとき  
而し人死るればは色坊を執りて命を代へ攘りの  
袈裟をうぬれぬらありし時念佛してありあり  
く俗人として坊主の役をすり申ふ名をかりしけり  
代わりの百姓より一階かたり孫にたるとせぬ  
ゆへに存するいふ大津佐の十三佛といふる世に  
東海に花根小国系三橋の邊に多くいひかひ徘徊する雲  
助といふものありはけくの若も去るは身は花根の

⑤ 箱根の蜘蛛

日雇徒は夜をとりて暮合をすく終なきとあるは  
ひとへに浮きそのやうな境界をいふ雲といふなり  
は本條の蜘蛛をいひて古よりある名目しせきん迷谷山洞  
穴岩をいふをいひて山賊強盗の族蜘蛛の窟を  
窺ふありしゆへにいひ日本紀に三景行天  
皇御宇速見邑茲山有大石窟曰鼠石窟有  
二土蜘蛛按豊後国ナリ其津風土記に云世に偽者を  
土蜘蛛といふに云此人恒忘中奥故号之曰土蜘蛛  
を今今強盗したるに云其窟を公見其窟は勢ひ  
後部綱のたるといふ土蜘蛛も今今出のつとあり  
も今花根の雲に強盗を行ふ浮雲といふなり









（六） 伊豆心柳

修之於現ハ加藤郡ニ之社ヲ本柳ノのまニ凡三周リ  
 高十丈ニをシりテ葉ヲ厚クしテ時々節々ありシ葉ノ正物  
 されテ災難とシて守護ニ納じ又女人積り安  
 則夫婦ノ中じの海一きとくしはな他國ヲ掃し  
 走湯山大推現ト云テ祭神天恵徳耳守守  
 遍照權現祭神携幡千と姫社がニある也  
 ちと井ノ末ヤらノ末ノ方ク  
 高山の山依ハ修之一流とシて大波子属セ凡

（七） 若浦吹上松

紀州若浦所ノ吹上松ノ所ノ寺ノ以テ祈ス之ト傳ヘキト云

別名 吹上院  
山依七宇

吹上松



吹上松



浦三方よりして去凡なり入江よりして凡のまわりよりして  
かみすし童とと鹽よのりして破よせりけりおからる  
浪をりりし引浪をたつ二二のりりしをゆきま  
くして沖へおきりし 東照宮の階の下に下り松と  
云老樹のなまわりよりし海よりし  
このしよよなるよりし一は権現二には海よりし海より  
比る松やに塩浪の所男取らるるありしよりし  
○月不吹との松のその根八九丈余をわたりしを  
根との松よりしたる今も砂世のたなを大浪よふ  
根をわたりしよりしその井子おも板ありし  
ぬれもこころありしよりしわりの松し

③ 八丈偽鹹草

伊豆の偽

豆州八丈島に鹹草と云あり今日能を切りて  
且よせしよりてありし根大根のわく葉茶胡  
もゆるく二葉よりの葉の匂ひあり茎微紅かり  
若大根のわくよゆる葉に合はし赤色か合はし  
て疣瘡を治用しては偽の人の瘡を治りしよし  
織物に伸をふ笑伸と云小吹の肌子ありては  
成りてはゆるくかや一世の云女後傳ありしよりし  
本綱附録に技者の東に女圓あり鹹草を煮ると  
あり今も女多しと云量もよる一きと云法西常る  
偽くは去る久し偽よよりしと云し成りよりし今

結者として一里家の少後を井村と云は社あり公節大明神  
早先年東武の如く開帳わける弓矢を持東寺  
志より像し世俗の如くしと云はと云はと云は  
修くを志するにゆかりと云は其後北条早雲修く  
を成志する皆修夏の間は属凡九修と云

○八丈修 南小七里と東西四里周り十五里村又村あり  
羊百と油六百二十反八反掛八反五反掛又反二反掛三反  
並に太の魚所 二修より油令下油をと云し

修夏の下田より辰巳の島海上凡百里三修修より七十里上  
云は同修二十所修の早湖の時流川の如く成り  
八丈修の早修の三修修より八月中旬旬益九の村出取

三藏修の二三里も仍としてりの早修の時分より海外  
より三修より八丈の百三十三の早修の早修の早修  
たりより八丈修の早修より一里修の早修の早修の早修  
不修の早修の早修の早修の早修の早修の早修の早修

○普修 周り八里村より村八丈より二十里 八丈の早修

○大修 南小七里東西二里周り七里村又村羊百修  
下田より宣邦の早三里 ○三修修 南小四里東西一里

周り八里村又村羊百修下田より辰巳の早海上三十三里

○利修 一里四方周り二里家二十軒羊百修下田より外辰  
の早十二里大修の七里 ○新修 南小三里東西一里周り七里

家二百二十軒余羊百修下田より外辰の方十五里利修の三里





